

2023 年度 2 学期終業式

皆さん、おはようございます。

クリスマスが近づいてきています。カトリック教会においては12月3日の日曜日から救い主イエスのご降誕を迎えるための準備期間 待降節が始まりました。日曜日の度にろうそくの灯が1つずつ増えていき、明日12月24日の日曜日午前中に4本のろうそくすべてに灯がとります。明日の日没後にはクリスマスをお祝いすることとなります。私たちはクリスマス直前の今日、2学期の終業式を迎えています。2学期の締めくくりにあたり、この学期と一緒に振り返ってみましょう。

2学期は行事の多い学期でした。

9月には所沢市民体育館にて、4年ぶりに保護者の方の参観も叶い体育祭を行うことができました。嬉しさと悔しさと涙あり。お互いにエールを贈り合い学年の結束が最も固くなり、皆さんの成長が感じられる日となりました。

10月はじめには、中3が東北へ、高2が京都・奈良へ3泊4日の修学旅行に行きました。寝食を共にすることで、お互いの親睦を深め、共通の多くの思い出をつくり、訪れた地での学びを通して、それぞれの学年全体が成長し、自信もつけて帰って来てくれました。

11月19日(日)には親睦会が実施されました。一般開放はいたしませんでしたが、卒業生の入場制限をなくし、皆さんが招待した方がいらっしゃることで、一般開放と変わらぬ印象を受けるほどの多くの方が来校してくださいました。コロナ禍に始まった学年企画をはじめ、ふじなみ会の焼きそばやおやじの会の甘酒、ポップコーンなど飲食できるものも復活して賑わいを取り戻しました。さらに、新しい取り組みとしては、NPO法人聖母との協働で光塩バージョンのマラウイコーヒーを販売できたことが挙げられます。あらゆる企画を通して、皆さんの笑顔あふれる「もう一人の友」のために奉仕する一日となりました。

11月末には皆さんお一人おひとりからの誕生日のお祝いカードをいただきました。各クラスで素敵な表紙を描いてくださった方、今、光塩生として何を楽しんでいるかを報告してくださった方、今、興味を持っていること、推しについて紹介してくださった方、さらには私の良いところを探して、それを伝えてくださった方。皆さんからの心温まる「ことば」のプレゼントに慰められ励まされ、ますます頑張ろうという気持ちになりました。心より感謝申し上げます。

一昨日、12月21日には4年ぶりに6学年がメルセダリアンホールに集まり、クリスマス会が行われました。合唱コンクールにおいて6学年がお互いの歌声を聴き合うことのできる喜びを味わいました。密かに皆さんの歌声を聴きにいらしていたメルセス会の“松ちゃん”こと、シスター松田の感想をお伝えします。「それぞれの学年の発表がとっても素敵だった上に、お互いに相手に尊敬の念を持って聴き合う姿に感動しました。これこそクリスマスの意味よね。」とのこと。嬉しい祝福のお言葉ですね！それから高2有志の方のオルガン演奏、合唱部・アンサンブル部の発表も心和む時間でした。さらに、中3有志による発表で平和のために私たちに何ができるのか考えました。最後に、上智学院カトリック・イエズス会センターの“山ちゃん”こと、山内保憲神父様による講演「闇に住む民は光を見た」を通してクリスマスの意味について考え、これまでの振り返りと祈る時間を持つことができました。

このように、皆さんはこの2学期に多くの行事を通して、充実した時間を過ごし、今年度の目標「自己肯定感を高めよう！」(自分との出会い)を実現してきたと言えるでしょう。ここで、クリスマスの前に、もう一度、自己肯定感について考えてみたいと思います。

「自己肯定感」の提唱者と言われる高垣忠一郎先生は、その著書『生きづらい時代と自己肯定感』(新日本出版社)の中で次のように述べておられます。「私のいう自己肯定感は『評価』の自己肯定感ではなく、『ゆるし』の自己肯定感です。何度も何度も繰り返します。ゆるしの『よしよし』によって得られる自己肯定感です。こんなに迷惑をかけている自分でも、生きて存在していてもいい。生きて存在することをゆるされて、生かされているということをしみじみと悟る(自覚する)ことで得られる自己肯定感です。」

確かに人間は誰しも、動物や植物の命を奪い、それを食することで生きていますし、二酸化炭素等を排出して空気を汚して、排泄物も出して、ゴミを出して地球環境を破壊しながら生き延びています。そう考えると、その心は「ごめんなさい、ゆるしてください。そしてありがとうございます」という心で生きることとのことです。それは自分の良いところも悪いところも受け入れること、自分の駄目なところも含めて、自分をゆるし、自分に「自分が自分であって大丈夫だよ」と言ってあげることになります。

先日の山内神父様のお話にあてはめると、自分の光はもちろんのこと、闇の部分も全部含めて受け容れるということになります。山内神父様は、「皆さんの『光』と『闇』を教えてください」と尋ねられました。皆さんは『光』として修学旅行に行ったことや思い出に残った喜ばしいことを挙げていらっしゃいました。『闇』は課題(宿題)が多いことを挙げていらっしゃいました。ある先生は「クリスマスは楽しみなのだけれども、闇はこの時期、学期末の仕事がとても忙しいこと、光は2歳になる息子がいつでも可愛いこと」とおっしゃっていました。

先ほどの高垣忠一郎先生は他の箇所でも次のように書いていらっしゃいます。「『自分が自分であって大丈夫』という自己肯定感、自分の存在(being)が無条件に受け容れられ、愛されるという関係の中で確保されます。その安心が『人生の浮袋』だとも私は言ったことがあります。自分の存在が無条件に受け容れられ、愛されるという体験がないと、自分の居る場で常になにか役に立つことを『する』(doing)ことによって承認され、愛されなければならないと思うようになります。」

ここから先ほどの「光」と「闇」の例に戻りますと、どうやら being に目を向けている時は皆さん幸せで喜びいっぱい、「光」の中にいますね。doing に目を向けている時は、あれもやらなければならない、これもやらなければならないと憂鬱になって辛くなって生きづらさを感じているように思えます。

馬小屋で生まれたイエス様の背景については、山内神父様が教えてくださいました。皆さんと同じぐらいの年齢のマリア様は、当時の社会ではタブーとされていた結婚前の妊娠で周りからの偏見、差別にあう中で出産をしました。まさに闇の中での出産でした。ヨセフ様も同じように苦しみました。だからこそ、イエス様が生まれた時の喜びはとても大きなものだったことでしょう。まさに「闇に住む民は光を見た」のです。生まれてきた赤ちゃんのイエス様は、マリア様にとってもヨセフ様にとっても可愛くて愛おしくてたまらない存在だったことでしょう。「よしよし」と言ってあやしていたことでしょう。そこにいるだけで周りを幸せにする希望のとし火、希望の光です。生まれてきた赤ちゃんは多くの場合、この

ように無条件に可愛がられ、愛され、周りも幸せです。それは、doing に囚われている私たちを being に導いてくれるからです。

皆さんは、もう大きくなりました。お父様やお母様から「よしよし」とは言ってもらえないことでしょう。気が付いたらやらなければならないこと、doing に支配されてしまいます。時々、心の中で自分に「よしよし」と無条件に言ってあげてください。同様に周りの人にも無条件で「よしよし」という心持ちで接することで、お互いに「自分が自分であって大丈夫」というメッセージを伝えることになります。幼子イエス様を思い浮かべながら being に立ち返りましょう。私はそれがクリスマスの意味なのではないかと考えます。皆さんはいかがでしょう。

それでは良いクリスマスと新年をお迎えください。ごきげんよう。